



南海研だより

No. 11

1984年3月

岩切成郎南海研センター長がMBC賞を受賞

昨年の11月に南海研センター長の岩切成郎教授が、第16回MBC賞（南日本放送主催）を受賞された。岩切教授はこれまで30年近くにわたり、東南アジアや南太平洋諸国における漁村経済構造を中心とした現地調査・研究を積み重ねてこられたが、今回のMBC賞は同教授の「学術分野における鹿児島と東南アジアとの国際交流の拡大に関する寄与」に対して贈られたものである。

MBC賞の受賞理由は以下の通りである。

「氏はこれまで約30年間、漁村経済社会の研究を基に、東南アジアの地域経済研究に従事している。その間、鹿児島大学と東南アジア地域の大学との共同研究体制を確立、多数の留学生および国際協力事業団研修員の受け入れに努力した。昭和57年、鹿児島大学南方海域研究センター長に就任後は、鹿児島の地域的特性に立脚した東南アジアから太平洋を含む地域との共同研究を拡大している。また、現在鹿児島国際経済研究会の東南アジアプロジェクトリーダーとして、その調査研究をすでに3ヵ年継続中である。昭和45～47年、インドネシア水産総局顧問、昭和52年バングラデッシュ水産局専門家、昭和54

年国連大学研究員、また昭和56年、南太平洋大学客員教授等を歴任、東南アジア研究の全国的第一人者に数えられている。折から鹿児島県が昭和56年以来「南の起



岩切成郎教授

点づくり懇談会」を発足させ、各方面で積極的な国際交流を展開していることは周知のところで、氏の研究は、その意味で多大な寄与をし、今後益々の発展が期待されている。」

表彰式は11月14日に南日本放送会館で行なわれたが、同教授は南海研センターが主催する文部省特定研究の研究代表者としてパプア・ニューギニアに出張中であつたため、受賞式には夫人が出席された。

岩切教授に対し、この紙面を借りて南海研センターのスタッフおよび関係者からのお祝を申し上げるとともに、今後の一層のご研究の進展を願うものである。

大きい知見の集積

国際交流への進展を期待

岩 切 成 郎 (南海研センター長, 特定研究・研究代表者)

3ヵ年にわたるオセアニア海域における水陸総合学術調査が終了して、これからは多くの成果を発表する作業が始まる。振り返ってみると初年度(昭和56年)はフィジーへの往復で約8,300カイリ、2年度はソロモンを主として約7,800カイリ、そして本年度がパプア・ニューギニアで約7,600カイリと、台風を避けたり熱風に吹かれたりして地球を一周するほどの距離を航行した。鹿児島大学の各学部だけでなく、遠くは弘前大学、宇都宮大学、京都大学などからの参加を合わせると、延べ150人近い60歳から25歳までの多彩な研究者が南海研センターに結集して3回の調査隊を組織したことになる。

この大世帯が南太平洋海域と主な島嶼の海洋環境、生物生態と利用、社会生活、さらに保健衛生などの分野で集積した新しい知見は、日本国内だけでなく関係した諸国からも注目され、公表を期待されている。「かごしま丸」の高度な観測機器を使った海洋構造の調査をはじめ、フィジーの農林大臣自身から要請された土壌分析、ソロモンの戦跡近くの河口などで採取した巨大シジミ類の養殖実験、他方ではパプア・ニューギニアなど各地のピジン語の言語学的研究とか、土地所有と利用の実情調査とかの人文分野も加えて、調査の内容は枚挙にいとまが無い。これらの仕事がすべて相手国の大学ないし試験機関の研究者の協力で実施されたことは、研究のみでない相互の人間同士の理解を深める実績を残したといえよう。

近年独立したばかりの途上国では民族主義の発揚もあつて、外国調査隊の入国を制限したり地域での調査活動を警戒したりする姿勢が目立っているが、南海研センターの調査隊は事前準備が十分だったこともあつて、毎年各地で信頼され農地や漁場のなかでも能率よく立入り調査ができたし、一般に拒絶されやすい採血標本を採取できたことも鹿児島大学の評価を高める役割を果している。こうして新しい地域間の交流が定着していくのである。

まずフィジーの南太平洋大学は11の島嶼国家の地域国際機関として南海の都市スバ郊外に建築美を見せているが、初年度の共同調査が契機となって鹿児島大学との研究協力・交流の相互合意を得たのは昭和57年7月で、すでに教官や大学院生の往来が盛んである。またパプア・ニューギニアはオセアニアの途上国のなかでは面積も人口も最大で、将来は自主的な経済開発が期待されているが、本年の調査滞在中に同国唯一の総合大学であるパプア・ニューギニア大学から研究交流の提案を受けたばかりである。こうして南海研センターの活動は南太平洋諸国に波及効果をあたえるとともに、研究成果の拡大はもちろんのこと鹿児島大学での教育の内容も豊富にしているが、今後はさらに当該地域と日本の間での地域農漁業関係の技術移転や、学術・文化交流などに結実する研究の推進が期待されよう。

研究報告会と懇親会のご案内

■パプア・ニューギニア関係の研究報告会

日時 1984年3月23日(金) 午後1時～5時

場所 鹿児島大学農学部1号館124号教室(2階)

■懇親会

特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」は、予定通り無事3年間の調査が終了しましたので、本プロジェクトの反省を含めて懇親会を開催いたします。

日時 1984年3月23日(金) 午後6時より

場所 グリーンホテル錦生館(鹿児島市泉町11-1 0992-25-2525)

会費 5,000円

(懇親会への出席をご希望の方は至急センターまでご連絡ください)

パプア・ニューギニア学術調査の特色

—昭和58年度文部省特定研究を終えて—

平 田 八 郎 (調査隊・隊長)

今回の調査には、色々な特色があった。それは、ききこもごも、良いこともあれば、`語るも涙。`といった面もある。以下に、本調査の特色を述べてみる。

若さと行動力 まず、若さと行動力—これが何といても、今回の大きな特色である。1次、2次、及び3次の調査隊員の平均年齢は、それぞれ37.9才、37.8才と37.1才であり、今回の第3次調査隊は、今までと比較すると、最も若いチーム編成であった。その若さが、本調査隊の明かるさと活力を担っていた。例えば、パプア・ニューギニア国の最高峰であるウイルヘルム山(4,510m)に登頂したり、べらぼーに重い鉱石をドッサリ採集してきたり、とても年寄りにはできそうもない作業である。また、過去の航海では、一部の利用にとどまっていた船内の教官食堂も、今回は、昼は昼なりに、また、夜は夜なりに活用されていた。船の振動をもつとせず、ただ、ひたすらに、我が道を歩めるのは、やはり若さ(or若さモドキ)のせいではなからうか。

学外教官 隊の構成でもう一つの特徴は、学外教官の占める割合が高かったことである。別表(11頁)の隊員一覧のごとく、北は弘前大学から南は九州学院大学まで、8大学1博物館から計11名の教官が参集した。学内教官は13名であったので、学外教官の組織率は、45.8%である。このことも今回の調査を成功裡に終えた一因と思われる。国際共同調査をすすめる場合、一大学だけの対応と全日本的な対応とは、相手国関係者の受け止め方にも自ずと差がでてくる。パプア・ニューギニア大学のブラッシュ副学長は、全日本的なチーム編成と船での訪問に好感を抱いていた。そうしたことはかねてより予想されていたが、今回の調査でそれが浮き彫りにされた感じである。

手弁当物語 「能ある鷹、爪を隠す」とよく言われているが、「能ある研究者、手弁当を隠す」とは、あまり聞いたことがない。しかし、今回

の調査隊には、後者のセリフがピッタリである。海外学術調査には、私達も日の丸の旗を背負っているのだから、むげに手弁当を見せる訳にはいかない。従って、能ある研究者ほど手弁当のことを語ろうとしない。しかし多くの教官は、かなりの私費を本調査に持ち込んでいる。内助の功も本調査成功の大きな要因である。

国際活動には、継続性が肝要である。一時に多くは望まないにしても、いつまでも継続できるような体制が理想的である。手弁当スタイルでは永続きはしない。より若い教官陣が、どしどし気楽に参加できるようでないとい、発展性はおぼつかない。手弁当物語は、今回だけの特色であって欲しい。

国際交流 調査隊には学術調査のほか国際交流の任務も負わされている。まず、かごしま丸でのレセプションは、ラエとポート・モレスビーとで2回行なったが、いずれも大成功であった。その陰には、調査隊員の一致協力もさることながら、かごしま丸の全乗組員の尽力が多であった。東川船長以下乗組員各位に厚くお礼を申し上げたい。

ラエにある同国工科大学で開催したシンポジウムも今回の大きな特色である。双方から4名ずつ演者を出しあい、水産事情とその教育制度という課題で、活発な質疑応答が交わされた。いずれ、その会で発表された8編の論文は一冊の本として出版することになっている。またこのほか、ラエからポート・モレスビーまでの4日航海では同大の教授・学生ら6人がかごしま丸に乗船し、海洋観測等の日・パ共同調査が行なわれた。このような調査は、学術面のみならず、国際親善にも計りしれない効果をもたらしたと言えよう。今回の調査をベースとして今後の交流がますます発展するように熱望して止まない。

なお隊員一同、本調査のために種々ご尽力を賜った石神兼文学長はじめ本部経理部、庶務部、水産学部事務部等に心から感謝している。

調査隊事務局報告(1)

特定研究委員会の発足から調査隊の派遣まで

井上晃男(調査隊・事務局長)

I. 特定研究委員会

昭和58年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」(第3次, パプア・ニューギニア)を実施するに当り, 本研究が円滑に遂行されかつ最大限の成果を上げるため, 調査隊の編成, 調査日程の作成, 調査内容の検討などを行う「特定研究委員会」が作られた。この委員会は, 「本委員会委員の構成は, 運営小委員10名に兼務教官若干名及び水産学部練習船かごしま丸教官を加えた委員から成り, 兼務教官からの委員は運営小委員会に, また練習船からの委員は船長に人選を一任する」という兼務教官会議の決定に基づいて人選され, 発足したものである。

委員会の構成及び主な審議過程は次の通りであった。

1. 委員会の構成

岩切成郎(南方海域研究センター長; 委員長), 田代一男(教育学部), 田尻英三(同), 早坂祥三(理学部), 柳橋次雄(医学部), 有隅健一(農学部), 片山忠夫(農学部), 平田八郎(水産学部), 茶園正明(同), 新田栄治(教養部), 東川勢二(かごしま丸), 中野和敬(南海研), 井上晃男(同), 寺師慎一(同), 寺田勇文(同)(以上15名, 敬称略)

2. 審議過程および主な議題

第1回 昭和58年2月21日(月)

- これまでのPNGとの折衝経緯の説明及び今後の対応について
- 水産学部で決定した特定研究に関する運航計画の確認(58.11.10→12.21)
- 予備調査, 折衝のための井上委員のPNGへの派遣(3月下旬-4月上旬)

第2回 昭和58年3月2日(水)

◦主要課題の設定

第1課題(中野和敬): Rural areaの土地利用と陸上生態系の保全

第2課題(井上晃男): 熱帯水域の物質生産と資源の有効利用

第3課題(寺師慎一): 地域住民の遺伝と保健衛生

第4課題(岩切成郎・寺田勇文): Rural areaの社会及び生活構造

以上4課題を主な柱として隊員を募集。

◦予算書の作成

第3回 昭和58年4月26日(火)

◦隊員募集要領の決定

- 1) 募集期間 昭和58年5月9日~14日
- 2) 募集人員 兼務教官 約17名
教務補佐員 10名

◦PNG予備調査報告

第4回 昭和58年5月20日(金)

◦隊員の決定(第一次選考) 39名

◦調査日程の概略決定

第5回 昭和58年6月2日(木)

◦隊長, 副隊長, 船医などの決定

◦調査隊出発までの作業日程の確認

第6回 昭和58年9月28日(水)

◦調査日程の決定

鹿児島港発 10月27日

ラエ(PNG)着 11月7日

同 発 11月12日

ポート・モレスビー着 11月16日

同 発 11月23日

鹿児島港着 12月7日

◦調査隊員の最終決定 37名

◦井上委員を10月10日頃先発させることを決定

(次頁につづく)

II. 特定研究実施にいたるまでの主な経緯

- 在日パプア・ニューギニア大使館を訪問し、特定研究の概要を説明。実施にいたるまでの手続き、書類の提出時期等について指示を仰ぐ(57-8-30, 井上)
- 東京にて来日中のパプア・ニューギニア工科大学水産学部S. ANANTHAN 助教授と会見。調査の概要, 目的等を説明し, 今後の協力を依頼(57-10-11, 寺師, 井上)
- 調査研究の概要をPNG大使館及びANANTHAN氏に送付し, 関係諸機関への配布方を依頼(57-11-12)
- 東京のパプア・ニューギニア大使館を訪問し, 調査許可取得の可能性, その時期等について大使館のG.IVARAMI氏と面談(58-1-5, 中野, 井上, 寺田)
- 滞日中のANANTHAN氏と会い, 調査の日程, 内容及び現地での調査許可(政府及び関係地方政府)の取得方法について検討し, 関係諸機関への接触を依頼(58-1-31, 井上)
- パプア・ニューギニア訪問。PNG大学, PNG工科大学, IPNGS(パプア・ニューギニア研究所), 政府, 地方政府諸機関を訪問。調査許可の取得及び現地研究協力者の人選についてL.HILL教授(PNG大学理学部生物学科長)に一任(58-4-4~4-15, 井上)
- 調査研究に関する最終書面(Final Proposal)を送付。PNG大学及び同工科大学研究委員会あて, 研究協力依頼書を発送(58-6-26)
- PNG工科大学水産学部長W.Y.Tseng教授来日の折, 調査についての詳細な打合せ。全面的な協力依頼, 受諾さる(58-8-22, 寺師・井上)
- 井上PNGへ先発(58-10-11)
- Migration Officeで調査許可取得。テレックスがPNG大使館へ(58-10-14)

以上のような経過により, 調査隊は予定通り鹿児島港から出発した訳であるが, PNG政府の

調査許可がなかなか取れず, 関係者一同の心配も一通りではなかった。この間多くの方々の御指示を仰ぎ, またお知恵を拝借した。とくに以下に述べる方々にはお世話になった。ここに記して厚くお礼を申し上げる。

- 鹿児島大学農学部 有隅健一教授
- 慶応義塾大学文学部 近森 正教授
- 国際交流基金 仙石 敬氏
- パプア・ニューギニア大使館 G.IVARAMI氏
- 日本パプア・ニューギニア友好協会
梶塚喜久雄氏
- 日本・南太平洋経済交流協会
野崎芳朗氏, 小濱正助氏

更に鹿児島大学の事務局の方々, 中でも計理部, 庶務部および水産学部船舶係の方々の御努力, 御協力には心から感謝している。

III. 調査日程

昭和58年10月27日(木)

かごしま丸鹿児島港発
(途中洋上観測)

同 11月7日(月)

パプア・ニューギニア, ラエ港着
(調査活動。パプア・ニューギニア工科大学にて水産, 海洋関係の合同シンポジウム。同工科大学生, 高校生約300人かごしま丸見学。かごしま丸船上にて約100人が出席してレセプション)

同 11月12日(土)

ラエ港発
(ポート・モレスビーまでの航海中, 工科大学の教官2名, 同学生4名が乗船して共同海洋調査)

同 11月16日(水)

ポート・モレスビー着
(調査活動。かごしま丸船上にてレセプションー出席者約80人。ポート・モレスビー在住の日本人児童約40名かごしま丸見学。パプア・ニューギニア大学副学長邸にてレセプション)

同 11月23日(水)

ポート・モレスビー発

同 12月8日(木)

鹿児島港着
(台風のため1日遅れ。総日数43日)

調査隊事務局報告(2)

パプア・ニューギニアでの調査 — 調査許可取得まで —

井上 晃 男 (調査隊・事務局長)

南方海域研究センターの文部省特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」は、初年度の昭和56年がフィジーにおいて、第2年度がフィジー及びソロモン諸島において、それぞれ実施された。第3年度に当たる昨58年度は、以前からの調査希望地であったパプア・ニューギニアにおいて実施することが特定研究委員会で決定された。この調査隊に事務局長として参加したのものとして、若干の印象、反省などを記してみたいと思う。

それまでに同国(PNG)で調査、研究を行なった多くの研究者によれば、同国は調査・研究許可を極めて取り難い国の一つであり、中には許可取得の目途がついたとして同国に上陸したものの、終局的にビザがおりずに、泣く泣く母国に引き返した研究グループもあったということであった。このようなことから、調査隊出発の1年以上も前から在東京PNG大使館、PNGUT(パプア・ニューギニア工科大学)などと接触を開始した。当方の調査目的、予算、日程、隊員構成などを最終的に決定できるのが8月下旬という出港2ヶ月前であるため、予め3段階のProposalを用意することとし、いわゆる1st Proposalを先方に送付したのが、昭和58年1月下旬である。次いでより詳細な2nd Proposalを提出しても、先方からは何の反応もない。この時点で、特定研究委員会の決定に従って私が先方に行き、その時の状況や見込みなどを探ってくるようになった。何分PNGは初めての国でもあり、また頼りない知人が一人いるだけの同国で果してどれだけのことができるのか大いに不安であった。結果的には、在パプア・ニューギニア力石寿郎書記官の御協力で、IMIGRATION

OFFICE, MOROBE州政府、パプア・ニューギニア研究所(IPNGS)、パプア・ニューギニア大学(UPNG)、同工科大学などを効率よく訪問することができ、初めてお会いしたUPNGの理学部生物学科長L.HILL教授に“すべて”を依頼することにして帰国した。同教授は極めて気さくな人で、初対面でありかつ紹介者もなくいきなり飛びこんで来た私の話をじっくり聞いてくれ、とにかくまかせておけといわれ、ほっとして帰って来たというのが偽らざる心境であった。“すべて”というのは、①PNG国の調査ビザの取得、②関係州政府の調査許可の取得、③UPNG内部での研究協力者の斡旋、④UPNG以外の研究機関、たとえばPNGUTやIPNGSとの研究協力体制の確立等々であった。厚顔にもこれだけ多くのことを依頼したことになるだけに、UPNGのE.BRASH副学長の大丈夫という力強い言葉を貰っても、帰国して日が経過するにつれて、HILL教授がただでさえ超多忙であるだけに、不安は次第に増大して来た。文部省から予算が内示され、調査隊の最終行動計画が決定されたので、FINAL Proposalを作成し、調査隊員、調査地、日程、総合及び課題ごとの調査目的と調査項目などを盛りこんだ。この書類はそれまでの1次、2次のものと同様、在日PNG大使館に提出するとともに、UPNG、IPNGS、PNGUTなどにも同時に送付した。この最終提出書類を送付した後も、南海研に知らされて来るのは、たとえばラバウルのある州の調査不許可の通知であったり、あるいは医学班の調査活動は殆んど見込みがない等の情報であったりで、およそ希望をもてるような材料は皆無であったと言ってよい。

(次頁につづく)

このような悲観的な情勢下で日時はどんどん経過し、出港予定日を約2週間後に控えた10月11日、現状をよく調べ、一日も早く PNG 政府の調査許可を取るため私を先発させるという決定が特定研究委員会でなされた。この決定に基づいて急拠準備し、慌しくポート・モレスビー入りしたわけである。今思い返してもこの時の気持はまさにゆううつな極みといったところで、許可が取れなかったらどうしようという不安で一杯であった。幸い岩切センター長を始めとする委員会の方々が、やれる所までやってその時の結果次第で対応策を考えるからと暖かく励まして頂いたので、これを唯一の支えに努力してみることにした。現地では MIGRATION AND CITIZENSHIP DIVISION, DEPT. OF FOREIGN AFFAIRS AND TRADE に日参し、出港の6日前に TELEX が在日 PNG 大使館に入りぎりぎりではあったがともかく参加者全員の調査ビザを取得できた訳である。ただ医学班の調査活動だけはどうしても許可にならず、最後まで粘ったものの不本意な結果に終わってしまった。当初から医学調査は PNG では非常に難しいとの情報はあったが、その認識が甘く、山口、麻生、内川の各隊員に出発直前になって参加を断念して頂かねばならなくなってしまった。情勢判断が甘かったため、このようなことになり、出発に向けてあらゆる準備をされていたお3方には本当に申訳ない思いがする。今後の反省材料の一つである。

さて、紆余曲折はあったものの、ともかく事故もなく、大きな成果を挙げた今回の PNG 調査は成功であったといえよう。この調査の実施に当っては実に多くの方々にお世話になった。とくに鹿大農学部有隅健一教授、慶大近森正教授、上智大石澤良昭教授には種々の有益な御助言を頂いた。鹿大本部事務局中でも、庶務部、経理部の方々には特にお世話になった。多くの方々の御支持、御努力によってこの調査が実施され得たことを記し、心から感謝してこの項を終る。

かごしま丸医務室診療ノート

寺師 慎一(調査隊・副隊長、船医)

待ち時間零分、診療?分の医務室に閑古鳥の鳴く理想的な43日間、これが開業医ならこちらが金欠病とノイローゼに悩まされるところでした。しかし改めて診療ノートをめくってみると、患者にあぶれたのは鹿児島島の出入港日と10月30日(日曜日)の3日間のみで、残る日祭日も働いたことになっている。そうは言っても船は毎日24時間航行しているので、あまり自慢になる話でもない。

診療あるいは投薬はこの40日間で延べ144件、うちA型肝炎予防接種の20件が含まれているが、一日平均3.6件メシの種があったことになっている。その内容では、台風の影響を受けた日があったにしろ船酔6件と少く、皆良くがんばっていた様だ。そのほか眼科の4件にはラエの工科大学生の右眼の異物の1例が含まれている。いくらこの国の人々の皮膚の色が黒くても下眼瞼内側に黒色斑があるとは思えないし、よく見ていると外力で移動性がある。摘除してみると小さなスバエであった。シャワーをずぼらしたお陰で集まったのかも知れない。歯髄および歯周炎の13件、舌潰瘍、喉頭・咽頭炎、感冒の17件、肝臓を含む消化管系の32件、これには二日酔、環境変化による便秘とそのお友達のジがあった。境界領域あるいは加療中の高血圧症19件、肩こり、打撲などの9件、皮膚科ではクラゲの刺疹や作業用靴の使用義務に伴う水虫などの8件と多彩であった。小外科処置14件には、まさか準備してあった縫合3針を現地大学の船長に行ったことが含まれるとは考えてもいなかった。

皆大病なく心身ともに無事であったことの他の一因は食餌のバランスにもあった。船医自身例(わずか3日だが)を大学病院(立川主任)で試算してもらったところ、各日で種類と適量を心掛ければよろしいと結論出来そうであった。

——以上閉医務室——

今夜落語「死神」でも聞く。

〔調査の概要〕

第1課題・Rural Areaの土地利用と陸上生態系の保全

林 満 (班長)

第1課題「Rural Areaの土地利用と陸上生態系の保全」の10名の調査隊員は、農学(林, 東, 岸本, 松沢, 遠城, 合原), 生態学(中野, 渡辺)および鉱床学(根建, 円城寺)の3グループに分かれ, それぞれ別個に現地調査活動を行なった。

農学グループの調査地域は, Morobe州のLae, East New Britain州のRabaulとCentral州のPort Moresby近郊の低地で, そこで展開されている自給的農民農業とプランテーション農業の両者を対象として, それぞれの作物生産に関する多面的な調査であった。今回の調査の中で, 共同研究者はもとより, 大学や役所で接触した多くの人々(Expatriateと呼ばれている外国人)は, 独立以前から継続されている主にオーストラリア系のプランテーションについては, いたとも簡単に紹介, 案内してくれるが, 現地の人々の農家(集落)にはいることにはかなりの抵抗感を持っているようで, 最初のうちは集落での調査が出来ないのではないかと焦りさえも感じた。そこで, 農業試験場などを訪問した際は, 出来るだけ現地側の研究者との接触を計り, 彼らに集落への案内をお願いした次第である。しかし, 彼らもまた, まず最初にプランテーション農園に, つぎに小規模な商品作物の栽培農家へと案内し, 我々が興味をもつ自給的な農家への案内は最後になるのが常であった。

共同研究者らはもとより, 現地の案内役の中にも非常に印象的な人物に出会った。Mrs. Rosa (Bubia農業試験場長), Mr. Tani, Mr. Michaelの3人は, いずれもこの国の人で, 我々にかなりきびしい質問をあげせることもあったが, いったん納得したのちの彼らのアレンジ振りには大変満足させられた。そして Expatriate達と会う時の彼らの態度は, 堂々としたものであり, 農民には極めてやさしく接する態度には暖かみを感じられた。彼らのような人物が多く育つなら, 近い将来PNGにも独立独歩への道が開けるのであろうと感じた次第である。

生態学グループはMorobe州のWau付近とEast Highland州及びSimbu州の自給的農業の状態を生態学の観点から調査した。Wau付近は大体ブッシュ・ファローの段階にあり, 休耕期間の5年程度が普通である。主作物はタロイモであるが, トウモロコシとかヤムイモの畑も所所にあった。それに反して高地はグラス・ファローが多く, 急傾斜地でも丹念に耕作し, 主としてサツマイモを収穫している。また, 山地の自然植生についても調査した。高度が増すにつれ, シイ帯, Nothofagus帯というように優占種のはっきりした森林が現われ, ナンヨウスギ(Araucaria)等の針葉樹木も高地ではしばしば見られた。さらにウイルヘルム山のような高地では, 日本の亜高山帯に近い景観の植生が観察できた。

渡辺隊員は日長変化のない熱帯で, それぞれの種において, 花季がどのような要因で決まるかに興味を抱き, 主な種の花季についてのデータを集めた。

鉱床学グループの調査活動は, 前半はLae周辺, とくにWau金鉱床地域で, 後半はBougainville島のPanguna鉱山で行なわれた。鹿児島を出発する前にWau鉱山の経営者と面会できたこともあって, 現地でも大いに歓迎され効率よく調査と試料採集を行なえたばかりか貴重なボーリングコアを入手できた。但し, 鉱化作用後の地表水等の影響が大きいため, 今後の室内作業でどの程度のアプローチができるか不安である。

Panguna鉱山では当初ホテルとレンタカーを利用する予定であったが驚くほど費用がかさむため, 本特定研究の主旨と予算を説明したところ快よく独身寮を利用させてもらえた。当鉱床は典型的な斑岩銅鉱床で世界有数の規模を誇る。オープン・セットの中は車なしではとても調査にならない。調査中幾度もスコールにみまわれたが, 根建, 円城寺両隊員に雨具を使わせ自分はズブぬれになって案内してくれたチーフジェオロジストの姿には大いに感激したという。

〔調査の概要〕

第2課題・熱帯水域の物質生産と資源の有効利用

米 盛 亨 (班長)

はじめに第2課題の組織について述べる。この編成は先発の井上教授がLaeの工科大学(UOT)との打合わせによって準備され、今次調査活動の基本となったものである。

第2課題は3つのGroupに分れ、Group 1 (漁法：米盛、鷺山)、Group 2 (環境：平田、井上、加世堂、川口、黒田、戸石)、Group 3 (海藻：榎本、鯉坂) よりなっている。

しかし、この区分は絶対的なものでなく、医学班の木原隊員を加えて合同調査を行うことが多かった。以下に調査活動の概要について順を追って記述する。

(1) 漁法Groupと環境Groupは鹿児島出港と同時に諸測定を開始した。漁法Groupは曳縄実験を行って、曳縄張力、海水温、溶存酸素量の連続記録から対象魚の出現状況とその海域の環境要因との関係を求め、併せて魚の遊泳能力や釣がかり時の行動の推定を試みた。

環境Groupは隣、アンモニア、バクテリアなど6項目についてのユニークな連続測定を行った。これら両Groupの連続調査はかごしま丸の往復全航程を通じて行われた。なお環境Groupは鹿児島→Lae間の14°Nより1°Sにわたって13点、Lae→Port Moresby間で4点の海洋観測を乗組員との共同作業によって実施した。

(2) Lae碇泊中、Group 1, 2 および木原隊員はUOTのボートによる共同調査を、11月8日、9日の2日間にわたって実施し、曳縄漁で釣獲した大型カツオ類の胃内容物による餌魚調査、汽水域の多点採水、ウニの採集等で成果をあげた。この期間に海藻Groupは高速艇を用いて5地点の調査を行った。10日には水産班全員は、UOTとの合同シンポジウムを開き、日本側より平田、米盛、井上、榎本の4隊員が講演を行った。

またLae接岸時に約300名の大学生、高校生がかごしま丸見学に訪れた。その案内説明役に当たった。

(3) Lae→Port Moresbyの4日間の航海にUOT水産学部長以下6名の教官と学生が同乗し、海洋観測などの訓練が行われた。学習会その他のMeetingも持たれ、鹿大への留学希望が出されたりして有意義な航海であった。この間に海藻GroupはMadang地区の数点を調査して多大の成果を収めた。

(4) Port Moresbyでの約1週間の碇泊中、前半は各自でUPNG(Univ. of Papua New Guinea)の研究室訪問および書籍購入、博物館の見学等で過した。後半の11月20日より22日まで水産班全員に医学班の木原、仁平、有村隊員を加えて、UPNG理学部に所属するMotupore Research Centerで2泊3日の合宿を行った。この実験所はPort Moresbyの東方にある小島に所在し、車とボートを乗りついで約1時間半を要する。

2棟の宿泊施設があり新しい方には1ヶ月前から東大海洋研のResearch Groupが滞在していた。われわれは試料採集程度の積りであったが、実験所長との共同研究の話がもちあがり島の裏側3定点の採水を3時間置きに連続48時間行うことになった。そこで4名で1組の当直制をしいて対処したが、自炊ということもあってかなりの重労働であった。

しかし、全員の努力によって採水の合間にウニや海藻の採集も順調に進み、調査隊員の団結という意味で大きな成果を得た。また、われわれが主催してランプのもとで開いたささやかなMeetingに、東大Group男女7名、実験所側3名を招待したことも感銘深い出来事であった。

以上、第2課題の活動について概略を述べたが、1名の事故もなくそれぞれに予期以上の収穫を得られたことと思う。これはひとえに班員一同の協力の賜であることは申すまでもないが、緻密な事前折衝を先行された井上事務局長の功績と、職責多忙な平田隊長の積極的な研究参加の姿勢が大いに評価されるべきであろう。

〔調査の概要〕

第3 課題・地域住民 の遺伝と保健衛生

木原 大 (班長)

今回のパプア・ニューギニアでの調査では、第3 課題（医学）の調査活動に対し現地政府よりかなりきつい制約が加えられた。このため出発迄の間何回となく班会議がもたれ、どのような調査が可能であるか熱心な討議が行われた。しかし残念なことであるが、当初一緒に参加する予定であった血液、寄生虫のメンバーが、同行を中止せざるを得なくなった。そして最終的に寺師（南海研）、仁平（弘前大）、川路（歯学部）、川口（水産学部）、木原（医学部）の5 人の小グループになってしまった。

以下各隊員の調査活動を追ってみると、仁平は出港とともに活動を開始した。すなわち全隊員の中から有志を募り、毎日蓄尿して、航海中の各人の尿の量や成分の変化を知ろうというわけである。

第一目的地のラエ到着後寺師、仁平、川路の3 名はラエの工科大のキッシュ博士と調査の打ち合わせをすませ、同大学のクリニックを利用させてもらいながら、各自の研究テーマに従って調査を開始し、必要な情報・資料の収集に全力を傾けた。

5 日間のラエ滞在を終え、再度かごしま丸で次の目的地ポート・モレスビーに向った。同地ではパプア・ニューギニア大学のローリー教授を始め、多くのスタッフと面会し、熱心な討論を行い、多くの情報を得るとともに、日本では入手困難な貴重な文献や統計資料等を入手した。

一方木原は第3 課題の班長でありながら「海洋生物の毒」というテーマのため、その行動は川口とともに水産班と全く同じであった。現地の両大学の協力を得て、ウニ類を中心にした海洋生物を大量に採集し、持ち帰ることができた。ことにモツポア島での合宿生活はその美しい環境もさることながら、現地スタッフとの交流など実に楽しい思い出である。

〔調査の概要〕

第4 課題・Rural Areaの 社会および生活構造

片岡 千賀之 (班長)

第4 課題の調査隊員は、PNGの言語、宗教文化、政治、社会生活構造、マーケット、水産業について以下のような調査を実施した。

■和田隊員は、ピジン語の現状とその趨勢を中心に資料収集、とくにラジオ放送、市場等における音声資料を録音した。文部省が英語を国語として推進しているのに対し、ミッションはピジンの重要性を認め、現実に即応した布教・教育活動を進めており、今後も英語とピジン語の2 言語が併存する見通しを得た。民族語に関しては、アーデルベルト山脈の4 言語の基礎語彙100語を調査。その他に比較資料として24言語の聖書を入手。

■吉田隊員は、インドネシアでの調査に引き続き、ラエ、マダンで、11言語の指示代名詞の空間的意味成分の体系を調査した。その結果、たとえば、オーストロネシア語族のSururunga語の代名詞は13の指示詞を有する複雑な指示詞の体系を持ち、逆にパプア諸語のArapesh語では1つの指示詞しか持たないというような巾広い変異が見出された。

■寺田隊員は、ラエ、マダンおよびポート・モレスビーで、主としてキリスト教関係者に面接し、いくつかの宗教儀礼に出席した。とくに外来宗教としてのキリスト教の「受容」過程に関する諸問題を中心に資料を収集し、カーゴ・カルトを含む土着宗教運動とキリスト教ミッションの関係、パプア人を主体とした独立キリスト教会の形成などに関し、現状の一端を探ることができた。

■高橋隊員は、低開発国の近代化過程に関し、(1)PNGの主要経済州であるモロベ州のワウ地区の第1 次産業の実態調査、(2)首都モレスビー地区の政治資料の収集と政党関係者、PNG 大学政治学科とIASERスタッフの見解聴取を行った。

(次頁につづく)

その結果、PNGの政治は、経済内容に規定されつつアジア政策を模索する段階に達し、この政策をめぐる政治選択が政治勢力のベクトルを決定する状況に直面していることが理解された。

■石田尾・田島両隊員は、ラエ、ゴロカ、マウント・ハーゲンおよびポート・モレスビーで、都市とハイランド村落社会の生活構造を比較調査した。石田尾隊員は、政治経済面の変動にもなう生活様式の変化を、地域特性に着目して、聞き取りと資料収集を行なった。その結果、ハイランド村落から都市への人口流入による、都市部での失業率の増大と、生活様式の多様化の急速な進行が認められた。田島隊員はCity Councilの役割、販売、消費者の性格、価格形成のメカニズムに着目し、native marketを調査すると同時に、super marketとの機能、形態比較を行なった。また、マーケット論について現地研

究者と意見を交換した。

■岩切、鈴木両隊員は、ラエ、ラバウル、ポート・モレスビーで、大学、水産局、漁村などを訪問し、漁業関係資料の収集、聞き取りを行なうと同時に、市場の販売状況、漁民生活を観察した。PNGの沿岸漁業や水産物流通は、都市周辺でのみ商業的に行なわれ、その他の地域では自給的性格がきわめて強いこと、生産手段の部分的な「近代化」が伝統社会を変革することなく進行していることが認められた。

■片岡・倉元両隊員は、ラバウル、ポート・モレスビーで、PNGにおける資本制漁業であるカツオ釣り漁業、エビ・トロール漁業の展開過程を調査した。この漁業には日本資本が深く関与しているが、国際市場の変動、資源状況、現地化政策に規定されて、すべてのカツオ釣り漁業が撤退し、パプア湾でのエビ・トロール漁業も発展の限界に達しているもの、と考えられる。

昭和58年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」

(パプア・ニューギニア)

調 査 隊 名 簿

研究代表者	岩 切 成 郎	鹿児島大学南方海域研究センター長・教授・国際海洋政策学
隊 長	平 田 八 郎	鹿児島大学水産学部・教授・増殖生理学

第1課題・Rural Areaの土地利用と陸上生態系の保全

班 長	林 満	鹿児島大学農学部・講師・熱帯作物学
隊 員	東 照 雄	鹿児島大学農学部・助手・土壌学
隊 員	根 建 心 具	鹿児島大学教養部・助教授・鉱床学
事 務 局	中 野 和 敬	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・生態学
隊 員	岸 本 修	宇都宮大学農学部・助教授・比較農学
隊 員	松 澤 康 男	宇都宮大学農学部・助教授・植物育種学
隊 員	渡 辺 隆 一	信州大学教育学部志賀自然教育研究施設・助手・森林構造学
隊 員	円城寺 守	筑波大学地球科学系・講師・鉱床学
隊 員	遠 城 道 雄	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
隊 員	合 原 裕 人	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員

第2課題・熱帯水域の物質生産と資源の有効利用

隊長	平田 八郎	鹿児島大学水産学部・教授・増殖生理学
班長	米盛 亨	鹿児島大学水産学部・教授・漁法学
事務局長	井上 晃男	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・海洋生態学
隊員	榎本 幸人	神戸大学理学部附属臨海実験所・助教授・藻類学
隊員	鯨坂 哲朗	京都大学農学部・助手・水産植物学
隊員	黒田 正和	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
隊員	鷺山 直樹	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
隊員	戸石 泉	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員

第3課題・地域住民の遺伝と保健衛生

班長	木原 大	鹿児島大学医学部・講師・生理学
隊員	川路 則友	鹿児島大学歯学部・助手・口腔解剖学
副隊長・船医	寺師 慎一	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・病理学
隊員	仁平 将	弘前大学医学部・講師・衛生学
隊員	川口 智治	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員

第4課題・Rural Areaの社会および生活構造

隊員	田島 康弘	鹿児島大学教育学部・助教授・人文地理学
班長	片岡 千賀之	鹿児島大学水産学部・助教授・水産経営経済学
事務局	寺田 勇文	鹿児島大学南方海域研究センター・助手・宗教人類学
隊員	和田 祐一	国立民族学博物館・教授・言語人類学
隊員	吉田 集而	国立民族学博物館・助教授・認識人類学
隊員	高橋 康昌	群馬大学教養部・教授・政治学
隊員	石田尾 博夫	九州学院大学教養部・助教授・社会学
隊員	鈴木 隆史	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
隊員	倉元 直一	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員

第5課題・西部熱帯太平洋の海洋構造とその変動に関する研究

班長	東川 勢二	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸船長・助教授
隊員	西 徹	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸一等航海士・講師
隊員	有馬 純宏	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸二等航海士・助手
隊員	益満 侃	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸三等航海士・助手
隊員	山口 照男	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸機関長・講師

センター研究会・活動報告

1983年9月から1984年2月までの南海研センターの定例研究会活動は以下の通り（1983年10月～11月はパプア・ニューギニア現地における特定研究のため休会）。

■ 第20回（1983年9月26日）

「熱帯域の有毒魚介類」をテーマとし、トヨタ財団の後援によりシンポジウムが行なわれた。研究発表題目および発表者は、以下のとおり。

「熱帯域の有毒魚介類」

安元 健氏（東北大学農学部）

「シガテラに関連する鞭毛藻と毒の性状」

安元 健氏（東北大学農学部）

「熱帯域の有毒鞭毛藻の分類」

福代康夫氏（東京大学農学部）

「シガテラ毒化原因鞭毛藻の分布と成育環境」

井上晃男氏（鹿児島大学南海研センター）

“Ciguatera Outbreaks Induced by Disturbances of Coral Reef Ecosystem”

Raymond Bagnis氏（“Louis Malarde”
Institute for Medical Research,
French Polynesia）

“Ciguatera, Clupectoxism, and Other Sea-food Poisoning in Fijian Waters and Their Impact to the Utilization of Marine Resources”

Uday Raj氏（Institute of Marine
Resources, The University of the
South Pacific）

「熱帯域のまひ性貝毒原因鞭毛藻と毒の性状」

大島泰克氏（東北大学農学部）

「熱帯域のカニおよび巻貝類の毒化原因と毒の性状」

小瀧裕一氏（尚絅女学院短期大学）

総合討論

座長 神谷久男氏（北里大学水産学部）

なお、このシンポジウムの研究発表要旨は次号に掲載される予定である。またフル・ペーパーはOccasional Papers（『南方海域調査研究報告』）として、本年夏ごろに刊行される。

■ 第21回（1983年12月19日）

「クラカタウ諸島の地理生態学」

湯川 淳一氏（農）

山根 正気氏（理）

■ 第22回（1984年1月23日）

「南太平洋諸国のカツオ漁業」

片岡千賀之（水産）

■ 第23回（1984年2月6日）

「熱帯と肝臓病」をテーマにシンポジウムが行なわれ、80名をこえる参加者を得た。研究発表題目および発表者は、以下のとおり。

座長 橋本修治氏（医学部第二内科学講座）

「ソテツ種子含有配糖体(Cycasin)による実験的肝癌」

小林 昭氏（農学部農芸化学科）

寺師慎一氏（南海研センター）

「ウイルス性肝炎の疫学、臨床、病理」

志方俊夫（日本大学医学部病理講座・

長崎大学熱帯医学研究所防疫部門）

「熱帯地における主な出血熱、原虫感染症、中毒性疾患の肝臓病変」

板倉英世氏（長崎大学熱帯医学研究所
病理学部門）

総合討論

座長 橋本修治氏（医学部第二内科学講座）

なお、このシンポジウムの研究発表要旨は次号に掲載される。速記録はOccasional Papers（『南方海域調査研究報告』）にまとめられ、本年夏ごろに刊行される予定である。

〔第22回研究会発表要旨〕

クラカタウ諸島の地理生態学

湯川 淳一 (農)

山根 正気 (理)

インドネシアのジャワ、スマトラ両島の間に浮ぶクラカタウ諸島の生物は、100年前1883年の大爆発で、降りつもった数10メートルの火砕流・火山灰にうまり壊滅的打撃を受けたといわれる。現在本諸島は大ラカタ島（大爆発を起した旧クラカタウ島の $\frac{1}{3}$ ）、セルツング島、小ラカタ島、そして1927年以降の火山活動で誕生した新クラカタウ島の4つの島から成る。

以来クラカタウ諸島は、新天地への生物の移住過程を研究する天然の実験場として多くの生物学者の注目を集めてきた。古くは、ファン・リュウーエン、ダンメルマンなどオランダの研究者が精力的研究を進めたが、1934年以降は戦争などの諸事情で50年間調査がとどえていた。インドネシア科学院 (LIPI) は1981~82年に各国研究者に呼びかけ、この興味深い島々の総合学術調査を実施した。私たちは、田川日出夫教授を隊長とする鹿児島大学隊に加わり、1982年7~8月、10~11月に昆虫を中心とする小動物の調査に従事した。

私たちの主な目的は、クラカタウの事例もとに現代の生物地理学、島嶼生態学の理論の妥当性をさぐることであった。まず、従来の記録 (1908, 1919-22, 1932-34) と今回のデータを総合し、昆虫類のクラカタウへの移住曲線を描き、マッカーサーとウィルソンが提出した島での種数平衡理論を検討した。これまでにチョウ類と有剣膜翅類 (ハチ) について比較的信頼できるカーブが得られた。それによると現在もカーブが上昇中のグループがある反面、ドロバチ科、シロチョウ科などのように1933年以降種数の増加がほとんどみられないグループもあった。後者の場合、すでに島に生息できる種数の平衡 (移入率と絶滅率のバランスで決まる) に

達している可能性が示唆された。一方、セセリチョウ科は1933年より種数が減っていた。これは森林の発達にともなう食草 (カホン科植物) の減少に起因すると考えられる。いずれにせよクラカタウの昆虫相は依然流動的であり、マッカーサーらのモデルを検証するにはまだ長年月にわたる追跡調査が必要である。

大洋島など生態的ニッチに空白がみられる環境では、しばしば特定の生物種が大発生する。クラカタウでは、カイガラムシの1種と *Dacus* 属のミバエで大発生が確認された。このカイガラムシは、*Ficus* 属など多数の植物の葉に付着していたが、とくに *F. fistulosa* ではほとんど100%の葉に寄生がみられた。また、ジャワやバナイタン島にくらべ寄主植物の範囲が広がっていることもわかった。ミバエはトラップにより7種が採集され、大半の種で誘殺数は時間当たり1個体未満であったが、*D. albistrigatus* 1種だけは時間当たり平均26~650個体という通常では考えられないレベルで誘殺された。

シロアリはクラカタウ全体で5種類が採集されたが、ジャワなどに多い落葉や腐植土を食べる土中営巣性種はふくまれず、すべて木材食で、材中あるいは樹上に営巣するタイプであった。このことは、クラカタウのシロアリが漂流木に付着して移住してきたことを示しており、実際海岸にうち上げられた流木からコロニーが発見された。

脊椎動物は、ミズオオトカゲなど8種が確認された。人為的に導入されたと考えられるネズミ2種 (*Rattus rattus* と *R. tiomanicus*) は島ごとに住み分けており、小島における競争的排除の例として注目される。

〔現地調査報告〕

フィジーの魚貝毒調査

井上 晃 男 (南海研)

昭和58年度の文部省海外学術調査「有毒鞭毛藻に起因する熱帯域魚貝類の毒化現象に関する調査研究」(研究代表者・東北大学農学部安元健教授)の分担研究者の1人として、本年1月16日～29日の間、フィジーでの現地調査を実施した。この調査は、従来、主として仏領ポリネシアで実施して来たものを、より幅の広い調査項目を準備してフィジーにおいて行なおうとするものであり、参加研究者4名、しかも各々が時期、目的をずらして調査を実施したものである。

過去フィジーには鹿児島大学からも多くの研究者が訪れており、たとえば昭和56及び57年度には、南海研の特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」によってそれぞれ約35人の研究者が、また昭和58年度には理学部早坂祥三教授を研究代表者とする「フィジー諸島付近、オウムガイ自生海域における海洋生態学的研究」のグループが約40日にわたって熱心な調査活動を実施している。また、鹿児島大学と南太平洋大学(USP)との間に、研究協力に関する合意書が取りかわされたのは、57年7月21日のことで記憶に新しい。一方、現在3名のフィジーからの留学生が水産学部において勉学中である。

このようなことから、同国については多くの機会に紹介され、また種々の調査結果についてもいくつかの学術刊行物を通じて明らかにされている。従ってここでフィジーについて述べることはいささか屋上屋を重ねるきらいがないで

もないが、機会を得たので、私が実施した調査を中心に、いささかの印象、感想などを記すことにしたい。

フィジーは、南太平洋上約230,000km²に広がる300以上の島々から成り、この中では、ビチ・レブ島とバヌア・レブ島の2島が図抜けて大きく、両島で総陸地面積の85%を占めている。大部分の島は、少なくともその一部分にさんご礁が発達しており、約100の島々は無人島である。この総面積がほぼ四国に匹敵する国の首都はビチ・レブ島(VITI LEVU)のスバ(SUVA)にあり、1970年10月10日、英国植民地から独立した。人口は約700,000人、この中首都スバに約10万人が住み、総人口の約50%がインド人、残りがフィジー人、中国人などである。主要産業は砂糖、コブラ、鉱業、観光などで、ビチ・レブ島東側のスバと西側のナンディ(NADI)の両国際空港を通じて多くの日本人観光客も訪れる。

さて今回の調査目的は、フィジーにおいて発生するニシンやイワシ類の毒化による高死亡率のクルペオトキシズム、低死亡率ながら発生件数の多いシガテラ、近年開発の対象とされている深海魚の卵巣や肝臓による食中毒の現地での発生状況を知り、併せて原因生物の分布状況、それをとりまく環境要因を調べること等であった。今回の調査期間が比較的短いことから、他の調査は私以外の分担研究者が集中して行なうことにし、私はこれまでフィジーで実施されたことのないシガテラ原因生物の分布をできるだけ

(次頁につづく)

(16) 南海研だよりNo.11

け詳細に調べることにした。調査はUSP海洋資源研究所(INSTITUTE OF MARINE RESOURCES, IMR)のU.RAJ所長を中心とするスタッフとの共同で実施した。調査場所としては、ビチ・レブ島と隣接のオバ・ラウ島を選んだが、仏領ポリネシア、ソロモン諸島などにおける調査結果から、バリア・リーフの水路部分を重点的にこなうことにした。いくつかの水路を選び、そこまで原則として小舟で行き、到着後できるだけ静かに大型海藻を取ることが現場での仕事である。海藻の種類、老若、などによる違いも同時に調べることにしたため、たとえ同一種類の海藻でも生育環境が異なると思われればできるだけ多くの試料を集めることにした。フィジー到着後しばらくは、干潮時が午前4～6時であったため、宿舎を出るのが2～3時、試料採取後IMRに帰着するのが10時頃という生活であった。一緒に仕事をするのが6～7人の若手研究者であるため、熱心な余り勢い試料数も増え、IMRでの処理、顕微鏡観察が終るのは夜も遅くなるの

が常であった。未だ得られた試料をすべて調べ終った訳ではないので、早急な結論を出すことは避けたいが、現在シガテラ中毒が頻発している水域はもちろんのこと、これまでこの中毒が余り報告されていない場所からも原因生物が見出され、調査した限りではどこもかしこも潜在的に中毒を起し得ると言って良さそうである。昨年9月に実施した「有毒魚貝類シンポジウム」の席でも話題になったように、この種の調査はその緒についたばかりであり、蓄積されたデータは決して多くはない。私が行なった調査は短期間のもではあるが一応の成果は得られた。調査を共同で行なった現地の若手研究者が、幸いこの仕事を継続してくれることになったので、今後加えられる資料も併せて検討し、将来の研究の発展の足がかりにしたいと思っている。人様が眠りこんでいる早晩からの調査が多かったにも拘らず、嫌な顔一つせずつき合ってくれたRAJ所長以下のスタッフに心から感謝して私のつたない文を終る。

(12頁より)

隊員	堀 脇 秋 男	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸一等機関士・技官
隊員	中 釜 勤	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸二等機関士・技官
隊員	田 中 久 雄	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸三等機関士・技官
隊員	吉 満 幸 雄	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸通信長・技官
隊員	帖 地 純 隆	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸通信士・技官
隊員	内 山 正 樹	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸事務長・事務官

事務および技能補佐

事務局	有 村 正 男	鹿児島大学南方海域研究センター事務室主任・事務官
事務局	加世堂 照 男	鹿児島大学水産学部附属水産実験所・技官

南海研だより No.11 昭和59年 3月15日発行

鹿児島大学南方海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2058